

農村自営業者の元気と知恵が農業の源泉

—横井時敬，東畑精一，そして金澤夏樹—



大泉 一貫

農業経営者が農業の中心

我が国の農業は成長産業に変えられると私は主張している。それには農業経営者を量的、質的に増加させ、技術革新を進めることが大切である。我が国農政は、93年の「新しい食料・農業・農村政策の基本方向」によって経営者を中心とした農政に舵を切ったと言われているが、いまだにその足腰は弱い。それは昭和のはじめから続く「国家主導的農政」があまりにも強すぎたせいである。

ただこの「国家主導的農政」は、我が国の長い歴史の中ではむしろ異端であろう。正統派は「老農」や「百姓」を中心とし、明治農法などを主導した系譜にあると私は考えている。我が国農村には江戸時代から通称「百姓」といわれる多くの自営業者が存立していた。明治の壬申戸籍以来、「百姓」は農民、つまり今日の農家のことととらえられるようになるが、そうではなく「農村自営業者」と理解した方が良いとするのは網野善彦等である（網野善彦『日本とは何か』講談社）。

百姓は、農作物の作付けにとどまらず農産加工にまで踏みこんでいたと言われている。彼らは、造り酒屋や藍染め屋などを営みながらも、それらの基盤として農業・稲作を行っていた。例えば、能登半島の輪島にいた百姓身分の時貞家は、廻船問屋を営みながらも農業を営む農村自営業者だったという。綿の作付けをしながら木綿工業を

営む百姓や、網元でありながら農業を営む半農半漁の百姓なども存在しており、年貢を納める義務を負うものはすべて百姓と呼ばれていたという。二宮尊徳に師事した人々や江戸時代に各地で農書を書いた人々はそうした種類の人達であった。

一国の元気は中産にあり

その構造は明治にも引き継がれ、税金(地租)を抛出し明治政府を支えたのは彼ら「百姓」の系譜を引く「農村自営業者」だった。彼らの多くは明治時代の農村のリーダーとして農家の指導を担っており、「老農」と呼ばれる者もいた。

秋田には石川理紀之助という老農がいた。「秋田種苗交換会」という農家たちの情報交換の場をつくった。この会は現在も続いている。また、福岡には「イノベーター」とも言われる林遠里が、関東には「人徳者」と称された舟津伝次平などがいた。明治14年にできた「大日本農会」はそうした人々の集まりだった。横井時敬はこの人達が元気になることが健全な国家を形成するとして「一国の元気は中産にあり」との名言を残している。

彼らは、農業だけではなく、流通業、肥料商、酒屋、金融業、不動産業など様々な事業に従事しており、それらのノウハウを農業に注ぎ込んでいた。明治までの農業には今日のような規制がなく、比較的自由に営農活動ができた。そのことが農法の普及など生産力の向上をもたらし、農業の発展

につながった。

農業に経営なし

だがこの系譜は大正から昭和にかけての「国家主導的農政」で縮小し、かつ終戦直後の「農地改革」によって潰れてしまう。

東畑精一は、シュムペーターのイノベーションを援用しながら農業分析を進め、農家は、日常の作業をする「単なる業主」(ルーチンワーカー)であって、「農業に経営なし」とした。「国家主導的農政」の中で、農業経営者によるイノベーションが見られなくなったというのである(東畑精一「日本農業の展開過程」1931)。代わって政府が経営を肩代わりするようになる。ただこの政府、リスクをとらない経営者であった。

経営がないのでは大学の「農業経営学」もたまったものではない。横井時敬は東京大学の農学第一講座(農業経営学)の初代教授でもあったが、経営学の対象を「小農」という言葉で表している(横井時敬『小農に関する研究』1927)。横井の言う「小農」には今日の兼業農家のような農家は入っていない。イギリスのヨーマンリーが念頭にあったのではないかというのが東畑精一である。柳田国男の「中農」も含め戦前の農学者が「農家」という場合には、すべからず自らの農業労働で自らを養っている農家を指している。江戸の「農村自営業者」である「百姓」や、さらには横井が親交を深めていた全国農談会、のちの大日本農会に参集する「老農」達がイメージされる。

つまりイノベーションを射程に入れつつ農業経営を考えるとすれば、これらの人々こそ中心になると言うことである。小農をヨーマンリーに擬するのは東畑の思い入れだったのかもしれないが、もし、農業革命を成し遂げたイギリスの独立自営農民が横井時敬の「小農論」の根底にあったとすれば、まさに横井の精神や論理、さらには生き様

に、経営者をベースとした農学構築の基盤があるということだろう。

元氣と知恵=イノベーション

金澤夏樹は、「個の農業経済=経営」を主張する横井を「珍しい学者」と評しながらも、彼の業績の中に農学第一講座(農業経営学)の精神を見る。金澤はその講座の四代目の教授にあたる。

「横井時敬は「農民がその利益を主張するのはその権利にして義務なり」として農業生産者の個の立場を主張した。しかしこの横井の農民の元氣と知恵が一国の農業の源泉であるという農業者を出発点とした考えは当時の農政では異端視されて「横井は農民を見て国家をみない」と批判をうけた。また国のみ視野にあって個の理解には至らないためであったが、個の力と幸福が国の力と利益とにどのように結びつくものなのか、この相互関係の重視に至るまでには永い年月を要し、そのためには農業経営も個としての内発的成熟を徐々に整えていく必要があった」(金澤夏樹『農業経営者の時代』2001)

「元氣と知恵」を東畑流に言い直せばイノベーションであろう。金澤夏樹は私の農業経営学の師でもあるが、彼には横井時敬の農村自営業者の系譜と東畑精一のイノベーションの系譜が流れている。これは同時に私の学問的基軸でもある。

江戸から続く農村自営業者を出発点とする経営者の思想は、明治農法で花開きはするものの、残念ながら我が国の近代農学の主流にはなり得ていない。私はそれでも、この血脈は我が国の歴史の中では正統であり、いまだに農村に脈々と息づいていると感じている。私は、こうした系譜にある農業成長論や、経営者革命論、元氣農業論を懲りもせずあちこちで話し続けている。

(おおいずみ かずぬき)
宮城大学名誉教授